

琉球方言における形容詞の比較研究 ―津堅島方言と多良間島方言―

Comparative Study of an Adjectives in Ryukyu Dialects

― Tsuken dialect and Tarama dialect ―

志學館大学 又 吉 里 美

千葉大学 下 地 賀代子

1 はじめに

形容詞とは、「名詞でしめされるモノやコトガラの性質、状態などをあらわす単語の種類」である（高橋他2005:137）。これまでの研究により、琉球方言の形容詞の構造には「(形容詞語根) + サ + アリ」もしくは「(形容詞語根) + ク + アリ」の2系統があり、琉球諸方言はそのいずれかの構造をとることが明らかにされている。また、この構造の違いはそのまま活用のタイプの違いとなっており、奄美・沖縄の北琉球方言を中心に多良間・八重山方言にかけて分布しているタイプを「サアリ型」、多良間以外の宮古諸方言と奄美大島北部方言に分布しているタイプを「クアリ型」と呼ぶ。

本研究で比較を試みる津堅島方言と多良間島方言は、ともに「サアリ型」形容詞をもつ言語である。だが、その活用のパラダイムは決して同じではない。また、古典語の形容詞のいわゆる「ク活用」「シク活用」との対応関係について見てみると、琉球方言の形容詞語尾 -saN はク活用に、-sjaN はシク活用にそれぞれ対応していることが指摘されている¹。しかし、首里方言をはじめとする沖縄本島の方言は -saN と -sjaN の対立を失い、-saN に集約されつつある。津堅島方言においても、-saN 語尾およびその音変化した -haN 語尾が見られ、-sjaN 系統の語尾は見られない。また、多良間島方言でも、-sa:L と -sja:L の違いは認められるものの、それはあくまでも音声的なものである²。

これらのことを踏まえ、本研究では、北琉球・津堅島方言と南琉球・多良間島方言を対象とし、それぞれの形容詞について、活用形式とその文法的意味を比較・考察していく。なお、比較は活用体系全体に及んで行われるべきであるが、紙幅の都合上、ここではまず終止形、連体形、準体形までを取り上げることとする。

2 各方言の形容詞の概略

ここでは、津堅島方言と多良間島方言の形容詞の語構成や語法などについてその特徴を述べる。その前に、両地域の地理的位置と方言区分について簡単に記しておく。

津堅島は、沖縄本島中南部東海岸に面した与勝半島の南東約5kmに位置する、周囲約8km、面積約1.8km²、人口およそ600人の島である。島の北に位置する浜比嘉島とともにうるま市に属するが、古来より、津堅久高（チキンクダカ）と称され、島の南に浮かぶ久高島（南城市）と併称されてきた。生業は漁業と農業が中心で、特に農業においてはニンジン

の栽培が盛んである。沖縄本島との交通手段は、平敷屋港からフェリーと高速船が出ており、1日に5～6往復している。地理的には沖縄本島の中南部に位置するが、言語的位置づけでは北琉球方言の沖永良部と論沖縄北部諸方言に属するとされている。

多良間島は、宮古島の西方約67km、石垣島の北東約35kmの海上に位置する面積約20km²、人口1370人（多良間村公式HPより）の島である。その北方約12kmのところにある水納島とともに多良間村を構成している。多良間島は、村落の中央を走る境界線道路の西と東とで、それぞれ仲筋（方言ではナカスズ [nakasuzi]）と塩川（方言ではシュガー [ʃuga:]）の2字に分かれ、水納島は水納字となる。仲筋、塩川のそれぞれに暮らす人々の触れ合いは日常茶飯事であり、言語コミュニケーション上の問題は全く無いと言っても過言ではない。サトウキビ栽培と肥育用仔牛の繁殖生産が大きな生業で、漁業は産業としてはあまり盛んではない。また多良間（島）方言は、言語区画上、宮古諸方言の中に位置づけられることが一般的となっているが、その言語的特徴として、宮古、八重山両地域方言それぞれとの類似点を持つことがこれまで多く指摘されている。

2-1 津堅島方言の形容詞

琉球方言の形容詞語尾は -saN であることがよく知られているが、地域によって、音韻変化がみられ、s が h になったり、脱落したりする。津堅島方言では基本形語尾の多くは -haN で現れるが、これは名護や大宜味、国頭などのいわゆる沖縄北部方言の特徴でもある。ただし、jaqsaN（安い）、waqsaN（悪い）などは -saN 語尾で現れる。-saN 語尾は前部の音が促音の場合に現れると考えられる。津堅島方言の形容詞の基本的な構造は以下に示すとおりである。

takahaN（高い）	taka + ha + aN	タカ-ハ-アン
jaqsaN（安い）	jasu + sa + aN	ヤス-サ-アン

構造は、語根 + ha/sa + aN（存在動詞「ある」）の構造をとり、語根 + ha/sa が活用 of 語幹として位置づけられる。なお、takaha-、jaqsa- のような「語根 + ha/sa」の形式を「ハ語幹」と呼ぶ。

さらに、h が脱落し、前部の母音が長母音化した形で現れたり、h が w に変化して現れたりすることがある。特に、-haN の前部が a の場合に、h が脱落しやすい傾向が見られる。たとえば、amahaN ～ ama:N（あまい）、kara haN ～ kara:N（からい）、apahaN ～ apa:N（うすい）などである。また、-haN の前部が u: の場合には、h が w に音変化するものが見られる。たとえば、tu:haN ～ tu:waN（とおい）、masuzu:haN ～ masuzu:waN（しおからい）などが見られる。h が脱落した形や -waN の形は -haN の形と混在しており、音韻変化の過程にあると考えられる。したがって、本研究では、これらの形容詞基本形語尾は -haN として取り扱う。

ところで、先に述べたように、琉球方言では -saN と -sjaN の対立が知られているが、多くは -saN に集約されつつある。津堅島方言においても、-sjaN 系統の語尾は見られない。

かつて -sjaN 系統の語尾であったのではないかということが語根用法においてうかがい知れるだけである。現在のところ、pirumasimuN（不思議なもの）の一例のみが見られるだけである³。

その他、語根の語法に関しては次のようなことが見出される。一、語根のみで名詞を修飾できる（3-3 連体形の項を参照）。二、語根のみで副詞的用法を作る⁴。isuna: sakuN（忙しくしている）三、語根を重ね、副詞的用法を作る。sabisabi tu suN（さびしい様子である）のように、「語根＋語根＋tu」で副詞的用法として用いられたりする。四、ハ語幹に -suN（する）が接続する用法がある。多くは感情形容詞に接続して、第三者の様子を描写する（例1、2）。

1 uri warabi-gwa pazikaha-suN.（この子は恥ずかしがっている。）

2 cju uturuha-si je ikaN=ba: su:wa.（人をこわがって、ほら、行かないようしているよ。） {note. 人見知りして、人の前に行きたがらないということ。}

上記に見るように、当該方言において、「語根」および「語根＋ha/sa」の用法には多くのバリエーションがあることが分かる。

以上は形容詞に関するものであるが、いわゆるナ形容詞に関しては津堅島方言ではあまり多くは見いだせない。de:zina（大事な）、te:sicina（大切な）などが見られるが、それらも、語根 de:zi、te:sici の用法が多い。

2-2 多良間島方言の形容詞

まず、多良間島方言の形容詞の基本的な構造を以下に示す。

takasja:L（高い）	taka + sja + aL	タカ-サ-アリ
jaqsa:L（安い）	jasu + sa + aL	ヤス-サ-アリ

語根＋sja/sa＋接尾辞aL（厳密には接尾辞化した補助動詞）の構造をとり、語根＋sja/saが活用の語幹として位置づけられる。但し、この方言の形容詞語根（taka-、jasu-）には、単独で名詞を修飾する、2つ重ねられた形で述語となるなど、独立性の高さがみとめられる。よって本研究では、名詞的接尾辞サの後接した takasja-、jaqsa- の形を「サ語幹」、サを伴わない taka-、jasu- の形を「基本語幹」と呼ぶ。なお、繰り返しになるが、活用の語幹となるのは前者のみである。

サ語幹について、-sja- と -sa- のように、末尾音に口蓋音と直音が現れているが、この方言では共通語の「サ」に口蓋音化した sja が対応するので、前者が基本的なタイプである。-sa- で現れるタイプは、その直前の音が促音化したために口蓋化を免れたものである⁵。すなわち、多良間島方言の形容詞に見られる -sja- と -sa- の別はあくまで音声的なものであり、いわゆるク活用、シク活用の区別を表すものではない。なお、末尾音が -cja-、-ra- で現れる形容詞もあるが、これらは以下に示される順行同化現象の結果生じたものと考えられ（名嘉真1983）、サ語幹の変種として位置づけられる。

* atsiʃa:m → attʃa:m 《熱い》

* kalʃa:m → kalla:m 《軽い》 (名嘉真1992: 605より)

活用について、これらは規則変化であり、これに不規則変化を示す ne:N(ない) が加わって、規則変化と不規則変化の対立となる。規則変化形容詞の活用の仕方は、サ語幹の違いに関わらず、基本的に aL (ある) のそれと同じであるが、その中核的な機能の違いからか、述語となる活用形それぞれのバリエーションは存在動詞 aL よりも豊かではない。だが連体修飾となる場合は、サ語幹、基本語幹の用法も盛んに用いられ、語彙的 (辞書的) な意味の違いによる差も現れている。

その他、語根の単独用法について触れておく。まず、津堅島方言と同じく、一、語根のみで名詞を修飾できる (3-3 連体形の項を参照)。二、語根を重ね、副詞的に働く。このとき、助辞 -tu を伴うことが多い。sjaʃisjaʃi-tu si: (さびしい様子である)。なお、副詞的用法はサ語幹にも見られる。upusja naki (大きく鳴く)。これらの副詞的用法、またスル動詞などくみあわさる用法については、稿を改めて比較を行う。

また、現代共通語に見られるイ形容詞とナ形容詞の区別も、積極的には見出せない。この方言ではナ形容詞に対応する語も、一部を除き、「語根+サ+アリ」という語構成を示している (ex. kiciʃisja:L 綺麗だ, janasja:L 嫌だ, piNnasja:L 変だ, ciNdara:sja:L 哀れだ)。

3 文法的意味の比較・考察

3-1 終止形・感嘆法

終止形・感嘆法は、文の終止に用いられ、主に話し手の驚きや感動など詠嘆的な意味を表す形式である。津堅島方言の形容詞終止形・感嘆法は以下の表に見られる形式で現れる。

ハ語幹形	takaha
ru 形	takaharu
i 形	takahai
nu 形	takahanu
muN 形	takahamuN

ハ語幹形の感嘆法は、それ自体で用いられるが、多くは文末詞を伴うことが多い。=ha: は相手への投げかけの他、「ure amaha=ha:」のように、自己の主観を述べる場合にも用いられる。ハ語幹形の使用実態として、単独で用いられるよりは「ハ語幹+文末詞」の形式が多い。

ru 形は連体形であるが、述語として用いられて詠嘆の意味を表す。係助詞 ru の結びとして表れる ru 結び形であると考えられる。しかし、係助詞 ru がなくても ru 形になる

ことも多く、全ての ru 形が ru 結び形というわけではない。また、ru 形と i 形との差異はまだはっきりしない。話者によっては、i 形の方が ru 形よりも強調度が高いという内省をすることもあり、ru 結び形の強意が残存しているとも考えられるが明らかではない⁶。

続いて、nu 形について見てみる。nu 形は感情の吐露を表す場合のみならず、物事の状態などを相手に伝達する場合にもよく用いられる。そのため、自己の主張を相手に伝達する場合に用いられる -jo や、疑問・反疑問を表す -na とともに用いられることが多い。muN 形についても同様のことが言えそうである（例12）。

- 3 iN jutaha=ha:. ええ、いいよ。
- 4 are-ja karada-nu jo:ha=je. あれは、体が弱くてね。
- 5 uri sa: aNci usuharu. このお茶はこんなに薄いことよ。
- 6 ariru sura:ru (あれぞ、美しい) {note. 2つを比べた時「あれ」の方が美しいということ}
- 7 uri pana-nu suraha-i. この花のきれいなこと。
- 8 su:-nu sa:-nu su:ha-i=jona. 今日のお茶の濃いことよ。
- 9 age jagamaha-nu. ああ、うるさい。{note. 親に反抗するときなどに使われる。}
- 10 uriN bo:ko:-nu wasa-nu=jo. これ、膀胱が悪くてね。
- 11 tsuwari-nu su:ha-nu=jo. つわりが強くて（ひどくて）ね。
- 12 e:mi-Nka waka:-muN⁷=na. (孫が描いた A さん (70代) は) エーミ (孫) より若いものね (若く描かれているんじゃないの)?

次に、多良間島方言の形容詞終止形・感嘆法について見ていく。多良間島方言の形容詞終止形・感嘆法は以下の表に見られる形式で現れる。

サ語幹形	takasja
モノ形	takasjanu (/ takasjaN)

サ語幹形について、サ語幹の独立用法の1つであり、文の終止に用いられて詠嘆の意味を表す表現となる。感情形容詞など、状態形容詞の用例が多く現れているが、特性形容詞もこれらの形をとることができる（例13～15）。

またモノ形について、この形式は形態的には津堅島方言の nu 形に対応するものである。やはり詠嘆の意味を表すが、サ語幹形と異なり単に驚きや感動を表すのではなく、「(高い)ので～できない」というような<原因・理由>のニュアンスを伴った表現となる。これは、モノの特性を表す形容詞で顕著である（例18）。モノ形の takasjaN という形式は確定条件を表す条件形と同音形式であり、またその末尾音 -N は -nu が弱まった形だと考えられる。以上のことから、モノ形は条件形からの転用であり、また『おもろさうし』に見られる「原因・理由を詠嘆的に示し、先行内容と後行内容を結び付ける」（内間1994：272）機能をもつ接辞、「モノ・モン」に連なるものであろう⁸。なお、takasjanu の形式は条件形として

は現れない。

- 13 “agai ma:N, Nzjo:sja, kaNsi-mai-du=na” -ti: upuiki-u si, 「ああまったく、哀れな、あのようにもな (ft. こんなことになるとは)」とため息をつき、
- 14 agai, sjukarasja. ああ塩辛い！
- 15 ai, zjikaN-nu nifusja. nuqtai nama-gami ku-N=ga. おや、時間が遅い。どうして今まで (ft. この時間になっても) 来ないのか (あら時間が遅い。どうして今まで来ないか)
- 16 A ; kju:-game: aqcjaN. — B ; aqcjaN. 今日は暑い — 暑い
- 17 azja-gama, kaNsinu ju:-du tura: mura-Nke: ki:, pītu-nu qfa-uba: nusumi: ikī-ti:-ja ar-aN. agai utuqranu. 兄さん、こんな夜に虎は村へ来て、人の子供を盗んでいく {ft. さらっ
- ていく} のんだよね？ ああ、恐ろしい
- 18 kunu ki:-ja takasjaN. この木は高い {note. 木の葉を取ろうとして}

両方言の感嘆法について、両者ともに、「ハ語幹」「サ語幹」の形式がある。ただし、多良間島方言では「サ語幹」がそのまま用いられているのに対し、津堅島方言では「ハ語幹 + 文末詞」形式が多く見られる。また、津堅島方言ではハ語幹に何らかの接辞が後接し、ru 形、i 形、nu 形、muN 形というように形式のバリエーションが豊かである。さらに nu 形とモノ形について、いずれも「(タカ) サモノ」に対応する同様の語構成である (と想定される) にも関わらず、その意味・用法においては同じではないことが明らかになった。

3-2 終止形・叙述法

3-2-1 断定

津堅島方言形容詞の断定表現は次の表に示すとおりである。

	非過去	過去
haN 形	takahaN	takahaqtaN

断定形では過去と非過去との対立が現れる。過去形には -ta が接続するが、-haqtaN と ta の前で促音化して発音されることが多い。また、saN 語尾も -saN と -sataN とで対立する。

- 19 misatoko:gjo:-juka tu:wa… tu:waN=ne. (北部工業は) 美里工業より遠い…遠いね。
- 20 sibuhaN=ro je nama Nrena:N=ro riqpani umaci-kara kiri=be. (このバナナは) しぶ
- いよ、イエ、まだ熟れていないよ。ちゃんと熟れてからあげなさい。
- 21 uri sa: su:haN=ro:hja na:hwiN ju: itiku:=be. このお茶は濃いよ、もうちょっとお湯入
- れてきなさい。
- 22 tu:na:tu uri-tu i:ti ma:haq-taN. ツナとこれと入れておいしかった。
- 23 ziko-ni hi:-gisa-si uturuhaq-ta=ha:. 事故に遭いそうになって怖かったよ。
- 24 kinu:-ja jasai-ga jaqsa-taN=ro. 昨日は野菜が安かったよ。

続いて、多良間島方言形容詞の断定表現について見ていく。多良間島方言形容詞の断定表現は、次の表に示すとおりである。

	非過去	過去
L 形	takasja:L	takasja:taL
(du 融合形	takasajada:L	takasjadataL)
M 形	takasja:M	takasja:taM

動詞と同じく L 形と M 形が現れている。前者にはさらに、係助辞 -du (ぞ) の融合した形もある (du 融合形)⁹。なお du 融合形は、述語の位置で、主に主語として文中に明示されているモノゴトが持っている「特徴」を表す。また M 形について、動詞の「m 語尾形」と同じく *mu (mo) の融合した形式であるが、形容詞文の場合、それが話し手の内的判断であること、すなわち、話し手 = 「評価者」の主体性が顕在化した表現となる (例30)¹⁰。

- 25 razjio kui-nu-du u:sja:L=dara:na. ラジオ (の) 声 (ft. 音) が大きいんじゃない
 26 Mme goneNsjei-N nari:Lru-gadu, mida aupaN-nu aL-ba pazukasja:L. もう (小学校) 5年生になっているのに、まだ蒙古斑があって恥ずかしい
 27 a, ba-ga-du baLra:taL, jurusi: qfiru. ああ、私が悪かった、許してくれ
 28 kata cja: ure:. saNpiNcja:ja katasjada:L. 濃いお茶それは。サンピン茶は濃い
 29 qva: mida du:nu imisja:L-ba, auku-ni: katamiLqro: mutsukaqsada:L お前はまだ体が小さいから、担ぎ棒で担ぐのは難しいよ
 30 kunu terebe: taigai takasja:M. このテレビは多分高い {note. 客として訪れた家のテレビを見て。実際の値段は知らない}

3-2-2 推量

津堅島方言形容詞の推量表現は次の表に示すとおりである。

	非過去	過去
=hazi 形	takaharuhazi:	takahaqtaruhazi

津堅島方言では、推量の用法として =hazi が動詞でも形容詞でも用いられる。連体形の -ru 形式に =hazi を接続させる。過去形の場合は、過去をあらわす ta の部分を taru に変化させて =hazi を接続させる¹¹。未来推量のほか、目撃していない事態の推量を表す。

- 31 asa ami pui-gutu pi:jaru-hazi=ro. 明日は雨降るから、寒いだろうよ。
 32 kagosima-ja asehaq-taru-hazi=ro. 鹿児島は暑かっただろうよ。

続いて、多良間島方言形容詞の推量表現について見ていく。多良間島方言形容詞の推量表現は、次の表に示すとおりである。

	非過去	過去
zī: 形	takasja:razi:	—

-zī の形は、動詞では主に＜勧誘＞や＜意志＞を表すのに用いられ、＜推量＞としての用法はやや周縁的である。だが形容詞では、当然、＜勧誘・意志＞の用法はありようがなく、zī: 形は＜推量＞の文法的意味を実現する形式となっている。なお、話し手の＜推量＞を表す形容詞述語文のもっともふつうの形式は、L 断定形もしくはL 連体形に=ge:rai、=pazi などが伴われた形であるため、zī: 形の使用頻度はあまり高くない。また、終助辞=ga とともに、話し手の＜疑い＞を表す文の述語にもなる（例34）。

33 ata: pari-du si-ba nufusja:razi: 明日は晴れる（と言っている）から暖かいだろう

34 si:ta jakuniN-nu Mme:, NdaNda-nu miduMqva-nu-ga zjo:sja:razi:=ga-ti:, panasū: Ndasi: buri-ke:, (新しい役人が多良間へ来ることになる) 下っ端の役人たちは、どここの女が（新役人の現地妻に）良いだろうかと、話を出していて、

3-3 連体形

連体形は、体言（名詞）が後に続いて連体修飾語となる形式である。津堅島方言形容詞の連体形は次の表に示すとおりである。

	非過去	過去
ru 形	takaharu	takahaqtaru
基本語幹連体形	taka	—
ra 形	aqkara:	—

連体修飾用法になる形態として、語尾が活用した ru 形と基本語幹によるものがある。この形式は北琉球方言に見られる形式でもある。基本語幹連体形の用法も多く見られるが、「基本語幹＋名詞」の法則性は ru 形に比べて低い。たとえば、話者の内省として、以下のようなことが得られた。

suragiN（きれいな着物）とは言えても suraisi（きれいな石）とは言にくい。一方、suraru kiN（きれいな着物）、suraru isi（きれいな石）は両方とも使用可能である。

ただし、ru 形についても、言いやすいものと言にくいものがあるようで、mija:（新しい家）は mi:haru ja: とはなりにくい¹²。以上のことから、基本語幹連体形と ru 形とでは使用実態に差があるように思われる。また、ra 形は色を表す akahaN、kuruhaN、siruhaN、o:haN に限って見られる。その構造はまだよく分からない。また、これらの形容詞は基本形 -haN が用いられることは少なく、断定形においても、aqkara:, maqkura:, maqsira:, o:ra: にコピュラ -raN や動詞 suN を伴った形で現れることが多い。

35 suraru tui-nu tiN-kara turakuN=ro je. きれいな鳥が空を飛んでいるよ、え（ほら）。

36 uriga-ru purumuN-ru jaru. これが古いものである。

37 waqta: ja: mineja iqta: mi:ja-raru. 私たちの家見たら、あなたたちは新しい家だよ。

- 38 ari cju guma:-cju-gwa:-ru=jaru. あの人は小さい人だ。
 39 maqkura: tui Nciku:=ga. 黒い鳥を見てこないか（見てきなさい）。
 40 aqkara: pana tutiku:be. 赤い花取ってきなさい。

続いて、多良間島方言形容詞の連体形について見ていく。多良間島方言形容詞の連体形は、次の表に示すとおりである。

	非過去	過去
L 形	takasja:L	takasja:taL
基本語幹連体形	taka	—
sī 形	pukarasī	—

これら三種の形式にはその形容詞の語彙的意味の違いによる使い分けがみとめられ、また、被修飾名詞の「質」を「規定」とするという「名詞修飾」の文法的役割から、その現れ方にも偏りがある。

まずL形について、叙述法・断定形の一つと同形であるため、一見、共通語と同じく「終止形」＝連体形であると言えそうだが、実際の使用においては、基本語幹連体形の方がかなり優勢である。形容詞の連体形は、かざられ名詞が指し示すモノゴトの、コンスタントに存在する「特性」を示すものであり（＜質規定＞）、テンスに無関心なのが基本であるが、L形にはテンスの対立が見られる（例43）。但し、非過去連体形はテンスに無関心であり、両者は、その文法的機能において対立していない。よって、L形に見られるテンスの対立は、あくまでも形態上のものにすぎない（擬似テンス）。また、L形は用例数が少ないのだが、upusja:L usī（大きい牛）、nagasja:L taki（長い竹）といった量的な程度を始め、cju:sja:L usī（強い牛）、umasja:L munu（うまいもの）、(munu ubui-nu) nifusja:L pītu（（物覚えの）にぶい人）など、ヒトやモノに恒常的に備わる＜特性＞を表す形容詞がこの形をとる傾向がみとめられる。また基本語幹の音節数も、形式の選択に関わっているようである。

- 41 hai, umasja:L munu-gama ni: fa:sja-da:ti izi:. ねえ、おいしいもの（を）煮て（あの子に）食べさせなさいって（あの子の母親に）言った（よ）
 42 aNsinu gagaL usī-mai-du, uqpuga-nu, de:N cju:sja:L usī-tu a:sjaiL=na:. そんな痩せた牛でも、大きな、1番強い牛と闘えるね {note. 反語}
 43 kure:, kunu, de:N cju:sja:taL usī-mai, gagaL usī-mai, usī-Nke: MmariL mai-ja niNgiN-du ataL-gadu, これは、この、1番強かった牛も、痩せた牛も、牛へ生まれる前は人間だったけど、

次に基本語幹連体形とsī形について、前者は、基本語幹が独立に連体修飾の機能を果たしているものである¹³。三種の連体形の中で最も優勢な形式であり、L形と同じく、主

にモノゴトの＜特性＞を表す形容詞がこの形をとる（例44～46）。後者は基本語幹に接辞 -sī がついた形式である。ヒトの内的な＜状態＞を表す形容詞のうち、特に、心理的な状態を表す形容詞が規定語となる場合に用いられる形式であり（例47～49）、他の形式、特に基本語幹連体形との間に明確な使い分けの傾向がみとめられる。すなわち、形態的な対立が形容詞の意味タイプを区別する手掛かりとなり得る。

44 are, naga e:gu ara:-dataM=jo:. アレ（は）、長い歌じゃなかったよ

45 we:, harucjaN-ga ke:ti buL. ure: uma ka:sī. ほら、ハルちゃんが買って（来て）いる。
それは美味しいお菓子

46 getsujo:-N-game-du bī:ta uja-nu Mme-nu ubuna:L. 月曜には、（身体の）弱っている
父親たちが、集まる {note. デイケアセンターの話。月曜は男性ばかりが来る日だということ}

47 ‘taramasjuNkani’-ti:-ja, pazikasī rikisi-Nka-kara-du Mmari: buL. 「多良間シュンカニ」
{note. 歌謡名} とは、恥ずかしい歴史（の中）から生まれている

48 jusjarabigata-N, kanasī qfa-nu Mme-u funi-Mkai sī-ga uriL-badu, 夕方、愛しい子供たち
を舟迎えに（ft. 子供たちの乗った舟を出迎えに）（北の浜に）降りると、

49 du:-Ndakari: kaNsi: Ndara:sī kurasū: sumi:-ja naraN-ti:nu, kīmu: muti: wari-tui, （他の
島人に）自分のようにこんな憐れな暮らしをさせてはならないとの、気持ちをもちなさ
っていて、

両方言の連体形について、まず、ともに基本語幹連体形（＝語根のみで連体修飾する）を持つことが共通点として挙げられる。特に、多良間島方言の基本語幹連体形は連体形の三形式の中で最も優勢である。またテンス対立をもつ ru 形と L 形について、いずれも「(タカ) サアル」「(タカ) サアリタル」に対応する、同様の語構成をもつことが窺える。なお、津堅島方言の形容詞連体形では基本語幹連体形と ru 形とでは形式面において、使用実態に差があるように思われる。

また、津堅島方言形容詞の ra 連体形、多良間島方言形容詞の sī 連体形は、ナカミは全く異なるが、それぞれ、その形をとることのできる形容詞の意味タイプに制限のある点で共通する。多良間島方言の場合とは異なり、津堅島方言の三種の連体形は形態的に対立しているとまでは今のところ言えないのだが、「ク活用」「シク活用」の対立とは別の原理による意味タイプと形式との相関関係が生じつつあるのかもしれない。

3-4 準体形

準体形は、名詞のように格形式をとることのできる形式である。津堅島方言形容詞の準体形は次の表に示すとおりである。

	非過去	過去
i 形	takahai	—
ra 形	aqkara:	—

準体形は i 形と ra 形が現れるが、ra 形は先に述べた、連体形と同じく、色を表す akahaN、kuruhaN、siruhaN、o:haN に限って見られるものである。

50 surai-kara mucikibe. きれいなから持って行きなさい。

51 magihai-kara tutikuN=ga. 大きいのから取ってこないか（取ってきなさい）。

52 aqkara:juka maqkuru:ru masi-jaru. 赤いのより真っ黒（＝黒）がいい。

続いて、多良間島方言形容詞の準体形について見ていく。多良間島方言形容詞の準体形は、次の表に示すとおりである。

	非過去	過去
サ形	takasja ¹⁴	—
ru 形 ¹⁵	takasja:qru (takasja:Lru)	takasja:taqru (takasja:taLru)

サ形と ru 形とで意味・用法は異なっており、サ形は、その形容詞が語彙的（辞書的）意味として表している状態や性質などを概念的に差し出すのに対して、ru 形は、その形容詞が語彙的（辞書的）意味として表わしている状態や性質などを帯びているモノやヒト、コトガラを表す。この両形式の意味・用法の違いは、サ形にはテンスの対立がなく、ru 形にのみ過去形が現れることから窺える。なお、サ形が名詞のようにふるまえるのは格ととりたてにおいてのみであり、派生名詞として扱うことはできない。

53 upuisjudiki-u si-tui nu:ri: ki-badu, takasja-nu futataki-bakaL-nu mi:L munu-nu taci qfagariqti:, 大漁をして（浜に）上がってくると、高さが2丈ぐらいいに見える者が（前に）立ちふさがって、

54 kaM-nu basjaqzi: wa:ri-tui kunu pitu-nu sini: uki-ti:nu jagumisja-kara, nama-mai tarama-zima-N-ja, simazju: M:na atsumari:-tui siciupunaka-uba: seidaiN si: buL sidai. 神様が怒りなさってこの人は死んだ（のだ）という恐れ多さから、今も多良間島では、島中みんな集まってスツウプナカを盛大にしているという次第です

55 kanagai-kara kada:nu akaL ara-baM, mata umaci ara-baM, mi: buL-daki si:-du, pi:sja: nidiraiL-ti: panasi=sja:. 昔から遠くの灯りでもまた火でも、見ているだけで、寒さは耐えられるという話だよ

56 qsabiL-bamai akasja:Lru-ga-du akaa: 精白しても赤いのが赤栗（だ）

57 kama-N-ja cjavaN-nu akasja:qru-kara ausja:qru-gami, iruiru tatidati qvi:taL あそこには茶碗の赤いのから青いのまで、色々各種類（のものが）売っていた

58 pi:sjaqru-game: Mbairai-N=na:. 寒いのは耐えられないな

4 まとめ

本論では津堅島方言形容詞と多良間島方言形容詞との形式・用法の側面からの比較を試みた。以下にその結果をまとめる。

- 1) 語構成においては「語根+サ+アリ」の形式から成り立つ「サアリ型」である。さらに、両者ともに、「ハ/サ」「シャ/サ」の対立が見られるが、どちらも後者の「サ」は jaqsaN、jaqsa:L のようにその直前の音が促音化したために口蓋化を免れたものである。形容詞の基本形の形成に両方言ともに口蓋化現象が関わっていることが明らかになった。
- 2) 感嘆法において、「ハ語幹」、「サ語幹」形式が見られる。ただし、多良間島方言では、「サ語幹」のみの形式が現れる一方で、津堅島方言では「ハ語幹」のみでは現れにくい。「ハ語幹+文末詞」の形式で、文末詞の接続が積極的になされる。さらに、津堅島方言では、「ハ語幹+接辞」の形式も多い。「ハ語幹」「サ語幹」形式に関しては、多良間島方言の方がその独立性が強いと考えられる。
- 3) 叙述法の断定形において、多良間島方言ではその動詞と同じく、L 形と M 形が現れる。形容詞文の M 形は、それが話し手の内的判断であること、すなわち、話し手=「評価者」の主体性が顕在化した表現となる。一方、津堅島ではそのような形式の対立は見られない。上記の 2) と関わらせて考えると、多良間島方言のモダリティ表現が動詞や形容詞の語形変化によって担われている面が小さくないのに対し、津堅島方言のモダリティ表現における活用形の占める位置は小さく、その代わりに文末詞の後接によって話者の判断や聞き手に対する態度を表現しようとする表現形式が発達していることが指摘される。それは、多良間島方言の推量形式が、L 断定形（あるいは L 連体形）に =ge:rai、=pazi などが伴う形式の他に、zī: 形という活用形を持つことから窺える。
- 4) 両方言ともに基本語幹連体形、および ru 形・L 形を有する。しかし、方言内での使用実態において、異なりを見せる。すなわち、多良間島方言の基本語幹連体形は連体形の三形式の中で最も優勢な形式である。一方、津堅島方言においては、形容詞の形式および意味によってその使用に偏りが見られる。
- 5) 連体形において、津堅島方言形容詞の ra 連体形、多良間島方言形容詞の sī 連体形は、ナカミは全く異なるが、それぞれ、その形をとることのできる形容詞の意味タイプに制限のある点で共通する。なお下地2008で、sī 連体形はヒトの心理的な状態を表す形容詞=感情形容詞のみによってとられる形式、すなわち、古典語のシク活用形容詞に対応する語のとり形式であることが指摘されている。
- 6) 準体形式においても 3) にまとめたように、語の形態変化のタイプを持つ多良間島方言の特徴と語形に接辞を伴う津堅島方言の特徴が大きく現れている。

以上、まとめたとおり、形容詞の語構成について、津堅島方言と多良間島方言とは「基本語幹+サ+アリ」の「サアリ型」である点が共通点として挙げられる。また、語幹形式および「ハ語幹」「サ語幹」の形式をもつなど共通の形式・用法もある。一方、両者の差異は、次のようにまとめられる。すなわち、ある語形に接辞や文末詞などを伴った表現を積極的に用いる津堅島方言と、活用形のバリエーションが多く、語形変化によってさまざまな表現を行う傾向の強い多良間島方言という、「表現」のための文法的手段の差異が両方言

の形容詞比較から見てきた。

本稿では、終止形、連体形、準体形について見てきた。引き続き、接続形や条件形についても比較研究を行い、両方言の形容詞の用法・形式および機能をより一層明らかにしたいと考えている。

参考文献 (50音順)

- 上村幸雄1961「沖縄本島」東条操監修『方言学講座 第四巻』東京堂
内間直仁1994『琉球方言助詞と表現の研究』武蔵野書院
亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編著1997『日本列島の言語』三省堂
工藤真由美2007『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』ひつじ書房
下地賀代子2008「形容詞の語彙的意味と形式の相関—琉球・多良間島方言—」『千葉大学
人文研究』37
下地賀代子2009「琉球・多良間島方言の形容詞」『国文学 解釈と鑑賞』ぎょうせい高橋太
郎他2005『日本語の文法』ひつじ書房
名嘉真三成1983「琉球宮古方言の形容詞」『琉球大学教育学部紀要』26
名嘉真三成1986「琉球方言の形容詞」『琉球大学教育学部紀要 第一部』29
*いずれも名嘉真1992『琉球方言の古層』(第一書房)所収; 555-601, 602~637
山本俊英1955「ク活用・シク活用の意味上の相違について」『国語学』23

-
- ¹ 上村1961、名嘉真1986などでも、沖縄本島方言の「サアリ型」形容詞に見られる -sa- と -sja- の区別が、古典語のク活用、シク活用という活用タイプの違いに対応していることが指摘されている。なお「クアリ型」形容詞について、名嘉真1986は「その区別(ク活用、シク活用との対応関係—引用者)を有する方言がこれまでの調査では一例もない」と述べている(名嘉真1992: 599-600)。
- ² 南琉球方言では、「サアリ型」か「クアリ型」かを問わず、ク活用とシク活用に相当する活用の型の区別がみとめられない方言の方が多い。但し、これは外形的な面においてのみのことであり、多良間島方言では、その語彙的(辞書的)な意味と文中における現われ方との間に相関関係のあることが明らかになっている。詳細については下地2008を参照されたい。
- ³ ただし、否定形は piruma:konaN (ふしぎではない) とあらわれる。そのほかの sjaN 系統と考えられる形容詞の語尾の否定形も -kunaN ~ -konaN となり、sjaN 語尾の残存をとらえられない。また、mizirasimuN (めずらしいもの) が中南部方言でよく見出され、-sjaN 語尾の残存としての指標となるが、津堅島方言では miNdahaN (めずらしい) が基本形として現れ、miNda:muN (めずらしいもの) となり、sjaN 語尾を見出すことは難しい。
- ⁴ isuna:suN は第三者の「忙しくしている様子」を表す。他に、次のような例文が見られる。
waN mikege:sugutu kwaNsa:mari mikege:suN. 私を憎らしくしているから(憎らしく

- 思っているから)、子ども達まで(私を)憎らしくしている(憎らしく思っている)。
これは、四のハ語幹に -suN (する) が接続する用法と何か関係があるかもしれない。
- ⁵ なお umuqsisja:L (面白い) は、2000年調査時、その基本形(終止形・叙述法・断定)は umuqsja:L の形で現れていた。これは、sja が直前の音節 si にひきずられ、その si を取り込んだあるいは脱落させたことにより生じた形式であると考えられる。umuqsisja:L の形は名嘉真1983 {1976~1977年調査} 等で報告されている。
- ⁶ 工藤(2007)において、仲間氏によって奄美方言では、「サイ形式」は話し手の目撃を表し、「サン形式」は目撃していない場合に使用することが指摘されている。しかし、津堅島方言において、このような差異は確認できていない。
- ⁷ wakahamuN > waka:muN であると考えられるが、語根 waka + muN の可能性も考えられる。その他の形容詞で -muN 感嘆法の表現が得られておらず、今後の課題としておく。
- ⁸ 但し、現代琉球方言にみられるムヌ、ムン系の助辞は、『おもろさうし』のモノ・モンが前後の項目を順接的に結び付けるのを主としているようなのに対して、「多少の不平・不満を詠嘆的に表して、先行内容と後行内容を逆接的に結び付ける場合が多い」(内間1994: 273 一下線引用者)。多良間島方言もその例にもれない。
- ⁹ なお、意図的に発話される場合の他、動詞を元とする文法的な派生形容詞には分析的な形も現れる。cf. /qvata-uba: si:ma-Nke: kairi buqsa-du aL=na-ti:, sjabaki: wa:L pazi ari: iki buqsada:L-ti: wa:ri=jo:./ (あなた達は島へ帰りたかと思ねなさはずだから、行きたいとおっしゃれよ)
- ¹⁰ この用法の M 形では、話し手の想定する「(評価の) 基準」との比較という面が強く押し出されており、非常に個人的な「記述」の文と言える。このことは、M 形が必ずしも聞き手を必要としないことから窺える。なお L 形は、独り言の文としては用いることができない。
- ¹¹ 沖縄中南部方言などでは「ラ形」が見えるが、津堅島方言では確認できていない。しかし、「ラ形」にあたるものがないとは言いきれないので、今後調査によって確認する。
- ¹² この場合、やや強調した印象を受けると内省される場合もある。
- ¹³ これらの用例は一見あわせ名詞の前要素のようにも見えるのだが、複合語に特有の意味の特殊化は伴っておらず、やはり、活用形の 1 つと捉えられるべきである。但し、u:ami (大雨)、upukadi (強風 {大風})、など明らかにあわせ名詞のものから、imi-ja: (小さい家 / 小屋?), au-manaku (青い眼 / 青眼?), naga-pidiL (長い日照り) などのように、接辞化・意味の特殊化の有無がはっきりしない用例も現れており、その線引きは難しい。
- ¹⁴ なお、語によっては、サ語幹ではなく基本語幹がサ語幹形相当の形式として現れる。cf. /sugu Mme aLkara:, uNsi ki:ga-u si: buriqti-mai./ (すぐもうあれから、あのよう気強くしていたのに (あの人は亡くなってしまった))
- ¹⁵ また ru 形の語構成は、「語根 + サ + アリ + ヲル」であると思われる。多良間島方言では動詞の準体形として kakiru のような形式が現れており、その推定される対応語形は「書キヲル」である。よって、形容詞の準体形についても、動詞の場合と同じく「ヲル」が融合して作られたことが考えられる。

(平成21年11月30日 受理)